

小学生区分

佳作

鹿児島県

いさ
伊佐市立菱刈小学校 二年
ありかわ
こはる
有川 琥晴

ぼくのだいじないとし

ぼくたちの二年生は、男の子七名です。ときどきケンカもするけれど、みんなかぞくみたいになかよしです。七名のともだちの中に、ぼくのいとこのとうまくんがいます。

とうまくとぼくは、ほいく園のときから、ずっといっしょです。一年生になったら、とうまくんは、ぼくたちといっしょに一年生のきょうしつと、すみれ学きゅうにもいくことになりました。

とうまくんは、すみれで、スライムとかブロックとかつくって、ぼくは、

「とうまくんたちは、ずるいな。」

と言って、とうまくんにもんくを言いました。

「ぼくも、とうまくんたちといっしょに、すみれであそびたい。」

と言って、先生に話しました。ぼくは、すみれであそびたいと思ったけれど、一年生のきょうしつで、みん

なといっしょに、いろいろなおべんきょうを学びたいという気もちもありました。でも、あそんでばかりいるとうまくんたちが、うらやましくて、いつももやもやしていました。だから、ぼくは、先生に、

「なんで、いつもぼくたちだけが、おべんきょうして、とうまくんたちは、あそんでいるのかな。ぼくも、あそびたい。」

と、言いました。先生は、

「とうまくんたちも、しっかりおべんきょうもがんばっているんだよ。」

と話してくれましたが、ぼくは、ひこうきやスライムやクッキングをしているとうまくんが、とてもうらやましかったです。

でも、一年生の夏休みがおわってから、しょしゃのじかに、とうまくんが、とっても上手に、じぶんの名前を書いているのを見てぼくは、びっくりしました。

「とうまくん、ひらがな上手だね。」

と言うと、とうまくんは、

「ありがとう。すみれでいっぱいいれんしゅうしたよ。」

と教えてくれました。とうまくんは、いつもすみれからかえって来ると、

「がんばって来たよ。」

と言います。

「とうまくんも、おべんきょうがんばっているんだな。だから、こんなにきれいな字が書けるようになったんだな。」

と思いました。ぼくも、二年生のきょうしつで、こくごもさんすうもがんばっているので、とてもうれしくなりました。

とうまくんは、ぼくのたいせつなところで、ともだちです。たくさんケンカもするけれどぼくは、とうまくんのすごいところをいっぱい知っています。足もはやくて、絵も上手です。でも、まめがにがてです。ぼくは、とうまくんが大好きです。すてきなところが、いっぱいあります。だから、これからも、いっしょにがんばって、いい六年生になりたいです。ずっと、はげましあっていききたいです。

小学生区分

佳作

千葉県

つくば 筑波大学附属聴覚特別支援学校小学部 六年

いたや 板谷 じゅんべい 淳平

「違いを認め合おうじゃない」

「え、何？もう一回言って。」

「やっぱりいいよ。」

これが、ぼくと姉の日常だ。ぼくは、先天性感音性難聴だ。生まれてから二日目に行った新生児聴覚スクリーニング検査で反応がなく、大きな病院へ行くことになった。会話はできるけれど、補聴器をつけて一生けん命聞き取っている。補聴器では、すべての言葉をひろえるわけではなく、聞きもらしが多い。特に、複数人での会話や一対一での会話でも、ざわざわした場所だと聞き取れなくて心がモヤモヤする。何度も聞き返すと相手に悪いと思ってしまうし、外でも家でも分かったふりをすることもある。色に例えると、聴者の人は白や黒のようにはっきりと音が聞こえるけれど、難聴のぼくは灰色のようにぼやけて聞こえる。姉のボソボソとした小さな声はぼくにとって灰色だ。ぼくの難聴を家族がすべて理解しているのかは分からない。

でも、難聴のぼくにも良い事がある。例えば、寝る時は雑音が聞こえないので、ぐっすりねむれて、耳栓がいらない。また、同じ補聴器をつけている人とは仲良くなりやすいことだ。

ぼくの周りで補聴器をつけている人は圧倒的に人数が少ない。だから、見つけるととてもうれしくなる。特に、大人のろう者は先ばいでもあり、安心感がある。昔のろう教育は、手話を禁止されていたり、聞こえないという理由で差別を受けたり、今よりもずっと厳しい社会だったと知った。

そこで、ぼくは「共生社会」という言葉を知った。「共生社会」とは、障害の有無や、性別、国せきなどは関係なく、全ての人が互いにそんな重し合いながら共に生き、支えあっている社会のことらしい。最初、家族は障害の有無に関係なく暮らしているから共生社会が実現していると思っていた。でも、難聴のことを理解し

ていなかったり、単に一緒に暮らしたりするだけでは、共存にすぎないということが分かった。

では、一般社会はどうか。ぼくが普段使っている電車の車内には、電光けい示板が無い。事故などで、急に電車が止まって車内放送があっても、はっきり聞き取れず、周りの状況が分からないので、行動が遅れてしまうかもしれない。つまり、声のみの情報には限界があるということだ。ふだんの会話やアナウンスも手話や字まくがあると生活しやすいと考える。

今の日本の設備は、健常者が使いやすい仕組みになっっていると思う。昔よりは共生社会に近づいているけれど、まだまだ実現していないと思う。なぜ理解が深まらないのか、ぼくは考えてみた。学校の時間割を見ていたら、障害や病気のことを学ぶ機会が少ないと思った。道徳で相手を思いやる気持ちなど考える授業はあったけれども、障害などを学ぶ授業が少なかった。

ぼくは、人は体の持ちよう、性別、国、得意なこと、苦手なことなどの色々なちがいを持っているということとを学ぶ機会を増やすべきだと思った。それを理解して、認め合うことで暮らしやすい社会になると思うから、一人一人の意識が変わればいいなと思った。

小学生区分

佳作

横浜市

横浜市立綱島東小学校 四年生

加邊 誠一郎

手話とふれあつて

ダムダムダム、バスケットボールのはねる音が体育館にひびく。今日、ここに集まっている人たちは、この音も聞こえないのか。とぼくは不思議な気持ちになった。

ぼくの妹は耳が聞こえない。だから、人工内耳をつけていて、ろう学校に通っている。そして、今日は、聴覚障害者が集まってバスケの練習をする日だ。ぼくも一緒に練習に参加することにした。

ふだんぼくは、妹が聴覚障害で耳が聞こえないことは気にしていなかった。妹が人工内耳をつけていれば、音が聞こえて会話することが出来るからだ。ぼくは友達と話すのと同じ様に声で話していたし、なにも気にせずに一緒に遊んでいた。ただ、お風呂やねる時は妹が人工内耳を外すので、ほんの少し知っている手話を使っていた。でも、ぼくはあまり手話を使いたいとは思っていなかった。

コーチの手話の指示が分からなかったので、周りの子の動きを見ながら、なんとか練習に参加した。そんなぼくにみんなは、指さしやジェスチャーで練習内容をやさしく教えてくれた。ぼくもだんだん覚えてきて、自分からも、ジェスチャーで伝えてみたり、みんなの表情をよく見て、何を伝えようとしているのか読み取ろうとがんばった。すると、みんながもつといっぱい話しかけてくれて、ぼくのさみしい気持ちや不安は消えていた。

試合の時、Sくんが

「シュートを一緒に決めにいこう。」

と手話で言ってきた。ぼくは「シュート」と「一緒」やる〴〵の手話を知っていたから、

「いいよ。」

と手話で返した。そして二人でシュートを決めた。一緒にシュートを決めたこと、そして、声で話すのとは少しちがうけれど、みんなと手話で話せてうれしかった。

ぼくは、このバスケ会から、少し手話にきょう味を持った。手話が出来れば、みんなと通じ合えて、もつとバスケも楽しめただろう。だから、もう少し手話を学びたいと思った。

妹の人工内耳のことも、バスケ会をきっかけにお母

前に妹のろう学校について行った時、手話で話しかけられた。けれど、分からなくて、なんだか恥ずかしい気持ちになった。テレビで手話の番組を見た時も、〴〵の動きがふくざつで大変そうだな。〴〵と思い、きょう味が持てなかった。妹とお母さんは、時々手話を使っていたけれど、ぼくには必要ないと思っていた。

そんなぼくが、聴覚障害の人達のバスケ会に参加した。正直、手話のできないぼくが、みんなと会話できるのか不安だった。ふんい気も何だかちがう。みんな声で話さないから、話し声が聞こえなくて、ボールのはねる音しかしなかった。

ろう者のコーチが、床を足でドンドンとふみつけてしん動を伝えた。それでみんなを集めて練習が始まった。やっぱりコーチの指示も手話だし、みんな手話で会話していた。ぼくは、みんなが何を言っているのか分からなくて、ひとりぼっちな気持ちだった。

さんと話した。お母さんから

「人工内耳をしても、聞こえづらくて困る場はたくさんあるんだよ。だから手話を使っているんだよ。」と聞いた。ぼくも手話の人々の中に入ると、みんなの言っていることが分からなくてさみしかった。もしかしたら妹も、そんな事があるのかもしれない。だから、妹と話す時は、バスケの時にやったように、ジェスチャーを付けたり、相手の顔を見て表情を見せ合ったり、口を大きく動かして分かりやすく話してみようと思った。そして、手話の勉強をがんばって、手話で妹と会話することが目標だ。

でも、正直手話は、なかなかむずかしそうだから、まずは指文字の勉強から始めてみよう。

小学生区分

佳作

和歌山県

ぼくにもできるよ

有田川町立鳥屋城小学校 四年
ながい
永井 来都

夏休みに入る前、学校の先生が足をけがしてまつ葉
づえで学校にきました。

先生は荷物を持っていて、とても歩きにくそうにし
ていました。

ぼくははじめは何も思わなかったけど毎日歩きにく
そうにしている先生を見て手伝ってあげた方がいいの
かなと思いました。

でもなかなか先生に声をかけるゆうきがでませんで
した。

ぼくはいつも先生がしんどそうに歩いているのを見
ているだけで何もしない自分にもやもやしていました。

その後、雨がふった日もいつものように荷物をもっ
てかさもさしてぬれながらまつ葉づえで歩いているの
を見ても、ぼくは声をかけられませんでした。

先生のやくに立ちたいと思っていて、先生の近くま

と思いました。

ぼくはできないこともたくさんあるけど、気づいて
いないだけで、できることももっとたくさんあると思
います。

自分のできることにできただけきづいて、少しでも
こまっている人のやくに立ちたいと思います。

で行ったのにと少しのゆうきがでませんでした。

そして夏休みに入ってしまった。

夏休みに入ってからぼくは「なんであの時声をか
けれなかったんだろう」とくやしい気持ちでいっぱい
でしたが、その何日か後家族で買いものにいって、ぼ
くらがエレベーターにのっているとき、あとから足が
不自由な人が車いすにのってエレベーターにのってき
ました。

その車いすの人はすぐにエレベーターをおりていき
ました。

ぼくはそこまで深く考えていなかったけど車いすの
人が安心しておられるようにあけるボタンをおしっぱ
なしにしてあげました。

車いすの人はおりる時に、「ありがとう」とにつこ
りわらいながら言ってくれました。

ぼくはこんなに小さなことでも感しゃされるんだな

小学生区分

佳作

岐阜県

パラスポーツと私わたしとまりちゃんとの出会いであ多治見市立笠原小学校 六年
横井 晶帆よこい あきほ

「キュッキュッ」「クルックルッ」「こっち、パス！」
「パスッ」「ナイスシュート！」
「やったー！」これは車いすバスケットボールでの一場面です。

私は小学校のパラスポーツクラブに入っています。このクラブに入ろうと思ったのは、昨年、小学校の学習の一環として行われた、「パラアスリート網本麻里選手に学ぶ」講演会＆車いすバスケットボール体験」がきっかけでした。それまではパラスポーツや、車いすバスケットボール、そして網本麻里選手について知りませんでした。ところが、網本麻里選手に出会えたこと、そして車いすバスケットボールを体験したことで、私は、これまでになかった思いを持つようになりました。

網本選手は右足に先天性の障害がありますが、小さいころから器械体操やミニバスケットなどのスポーツをし

ていたそうです。しかし、足に痛みが出てきて、中学一年生の時に医師からバスケットを禁止されてしまいました。手術をしてからは足に体重をかけることができなくなり、一度はバスケットを断念したそうです。それでも、お母さんのすすめで車いすバスケットに出会い、再びバスケットをプレーできるようになりました。

車いすバスケット体験では、児童十人对網本選手という、「十対一」の試合を行いました。そのプレーのすごさに圧倒されました。網本選手の車いすの操作はおどろくほど素早く、十人の間をすいすいとくぐり抜けてシュート。シュートが決まるたび学年のみんなからは大きな歓声が上がりました。私はというと、車いすを動かすだけでも必死で、無我夢中でパスをしたりシュートにチャレンジしたりして、網本選手のすごさに、改めて気づかされました。網本選手のプレーは、とても迫力があり障害を全く感じさせませんでした。

講演会の中で網本選手から「みんなは障害ってなんやと思う？」と質問されました。障害があると、生活がしづらくなります。もし私が障害を持っているとしたら、その障害を理由に、いろんなことをあきらめていたかもしれません。でも網本選手は、パラスポーツに出会ったことで障害があってもあきらめずにバスケットを続けることができ、今では、日本代表選手としてパ

リンピックにも出場し、中心選手として活躍しています。また、国内だけでなく、海外のチームにも入って自分のプレーがうまくなるように挑戦を続けています。網本選手のその姿がとてもかっこよく見えて、パラスポーツにも興味がわきました。私は初めて取り組むことに、これまでなかなか勇気が出せなかったけれど、網本選手のようにどんなことにもあきらめずに前向きにチャレンジしていける自分になりたいです。

「まりちゃんってよんでくれてええよ。」と言ってくださった網本選手。そのお話から、「身体や言語、文化などのそれぞれの違いを認め合うことで、みんな幸せに暮らすことができる社会にできる」ということを学びました。

パラスポーツは、年れいや障害の有無を問わず、「だれもが楽しめるスポーツ」です。現在、笠原小学校のパラスポーツクラブでは車いすバスケットの他に「ボツ

チャ」や「パラバレー」にも取り組んでいく予定です。この活動を通して、障害についての理解を深め、誰もが幸せに生きていくことのできる「共生社会」を広げることにつながっていったらと思っています。

まりちゃんとの出会いで「違いを認め合う」ということの大切さを教わりました。まりちゃん、ありがとう。パラスポーツの魅力を伝えるために、私はこれからもクラブ活動を頑張ります！そしてクラブの仲間たちと一緒にパラスポーツの素晴らしさを体験し、「違いを認め合う」仲間づくりに取り組み、笠原小を「違いを認め合える学校」にしたいです。